

授業評価へのフィードバックを授業時間中に実施する効果⁽¹⁾⁽²⁾

中島 誠・長濱文与・中山留美子

問題と目的

授業評価は、指導方法や教材の改善など、学習環境改善のために欠かすことのできない重要な要素の一つである。評価は大学の教育の質を高めるだけでなく、学生自身が学習成果を振りかえることで、メタ認知や適切な目標設定につながることを期待されている。しかし、授業に関する評価は学期末の授業終了時に行われるため、事後的に集計され、教員から受講生に情報をフィードバックすることは困難である。また、他方でフィードバックが得られない授業評価が繰り返されることで、学生が評価自体の意味を見失うという問題点も懸念される。本研究では、大学一年生を対象として授業中に授業評価へのフィードバックを行った結果をまとめ、その意義や効果を探索的に検討する。

授業評価アンケート 文部科学省(2003)¹⁾による報告書「大学における教育内容等の改革状況について」によると、国公私立で約80%の大学で授業評価が実施されており、さらに80%の大学で授業評価の結果を授業改善に反映させる組織的な取組が行われている。アンケートは様々な活用方法を考えることができ、「意識改革の起爆剤」、「授業改善の指針」、「学生と教員、教員相互のコミュニケーションツール」、「教育業績」、「アカウンタビリティの証拠」といった機能が紹介されている(田口, 2007)²⁾。

しかし、こうした状況に対して問題意識を提起する声も存在する。授業評価が実際の改善よりも説明責任として機能していること(松下, 2004)³⁾や、評価結果を授業改善に活かすかどうかは教員任せになっていたり、実施時期が常に学期末の授業修了間際であるために学生へのフィードバックがほとんどみられない(坂本, 2005)⁴⁾等の指摘が存在する。坂本(2005)の論文の中では、そもそも教員自身が授業評価に否定的な印象を抱いていることや、学年を追うごとに、学生の授業評価に対する期待が低下し、1年で約73%の数値が3年で約45%まで低下するといった、国内の調査結果が紹介され、それら状況を改善する為に、学期途中でのアンケート実施とフィードバックをするべきという提案がなされた。授業評価アンケートを学生にフィードバックする事により、教員は授業評価の結果を受け止め

て対応を提案することになる。また、学生がアンケートに対して、より肯定的な印象を持つようになる可能性ある。

形骸化する授業評価アンケートに歯止めをかけ、大学と学生に対して、現状を改善するためのより良いアンケートのあり方が模索されるべきだろう。

フィードバック 授業評価アンケートを学生にフィードバックする事により、大学として授業評価アンケートを活かした学習環境整備が行われるようになるだけでなく、学生の成長にも肯定的影響を及ぼす事が期待される。フィードバックの効果についてレビューした Hattie, & Timperley (2007)⁵⁾は、適切なフィードバックが、学生の努力や動機づけの向上、到達目標と現状の溝を埋める事への従事などの影響力を持つ事を指摘している。しかし、フィードバック活動は様々な場面で多様な目的を持って行われており、また学生の受け止め方も様ではないため効果の把握が難しいという指摘も存在する(Price, Handley, Millar, and O'Donovan, 2010)⁶⁾。とりわけ、本研究ではテスト回答の正誤を示すような知識の差を埋めるためのフィードバックではなく、学習成果の振り返りを促進する目的で行われた授業評価結果のフィードバックであり、情報の受け手である学生自身にとっても自らの学びとの具体的対応が把握しにくい可能性は存在する。

これまで、授業評価のフィードバックに焦点を当てた研究は多くない。フィードバックによって半期の学びの評価を振り返る活動が、学生の学びに肯定的影響を与えるのであれば、授業設計等に有益な示唆となることが予想される。そのため、本研究では、授業評価のフィードバックの効果として、学生の学びにどのような影響を与えるかという観点からも検討を試みる。

「4つの力」スタートアップセミナーにおける振り返り

以上の事から、本研究では、授業評価アンケートをフィードバックする事の効果を検討する。検討にあたっては、初年次教育科目「4つの力」スタートアップセミナー(以下、4SUS)を対象とした。

本論文の解釈に必要なため、4SUSについて簡単に紹介する。4SUSはほぼ全学の一年生が受講し、少数の教員が統一プログラムで授業を実施する。全学教育目標である「4つの力」として、「生きる力」、「感じる力」、「考える力」、「コミュニケーション力」への意識を高めるため、入学年度の前期に開講され、PBL形式で学生グループが主体的にプロジェクト活動に取り組む。

また、4SUSでは、授業のデザインとして15回目の授業において、授業評価のフィードバックが組み込まれていることから、本研究が対象とする問題の検証に適している。さらに、本研究によって授業改善の示唆がえられれば、大学入学時の段階から全学的規模で、大学の実施する各種アンケートと学生の関係をよりよい状態に保つことにつながる可能性がある。

以上の検討を行うにあたって、本研究では、テキストマイニングの技法を用いることとした。より具体的には、あらかじめ授業者側が想定した評価項目に対する反応を評定尺度法などにより数量的に求めるのではなく、まず授業評価アンケートのフィードバック活動へ感想を記述する事を求め、得られたテキストデータの分析を行うことで、学生のより素直な反応を把握することとした。テキストマイニングでは、個人が回答した自由記述による、構造化されていないデータに対して言語解析の手法を用い、キーワード抽出やカテゴリへの分類を行う。さらに、それらの出現頻度やキーワードと共起する評価的語等を分析して、回答者が感じ、考えた内容について情報を得ることが可能である。

方法

調査時期及び手続き 2010年度前期7月下旬から8月上旬。まず、「授業の振り返り」として14回目の授業において授業評価アンケートへの回答を求めた。その後、その結果はすぐに集計され、最終の15回目でクラス全体にフィードバックされた。フィードバック時には、授業の満足度の平均値や学生が授業に寄せたコメントの紹介、そのコメントに対する教員の返答などが提示された。その後、結果のフィードバックという活動そのものに対して学生がどのような印象を抱いたかアンケートを行った。

回答方法 CMSの一種である三重大大学 Moodle 上に回答フォーラムを設けた。学生は授業評価アンケート、フィードバックに関するアンケートの両方を、授業外の時間を用

いて、各自で Web 上の回答フォーラムにアクセスして回答した。なお、15 回目に授業評価アンケートの結果をフィードバックする際には Moodle の集計画面をスクリーンに投影して実施した。

分析対象 初年次教育科目を受講した学生の内、アンケートへ回答した 126 名。全 377 文から、11,763 の語が抽出された。

質問内容 15 回目の授業終了後に、学生に対しては、半期の授業に対する振りかえりを求める複数の項目が提示された。本研究で分析対象とした質問は「第 15 回授業におこなった「授業評価のフィードバック」について、感想をお伺いします。自分が評価・コメントしたことや他の受講生の評価・コメントが共有されること、それに対して教員からコメントを受けることに対してどのように感じたかについて述べてください。」の1問である。

分析ツール 本研究では、テキストマイニングの手法を用いて、学生の反応を分析した。分析には KH coder(Ver. 2.beta.25a)を用いた。

結果

学生の回答例を付録として 3 点論文末に示す。回答例は、ある程度の分量を記述している事を最低限の基準とし、ランダムに抽出した。

頻出語 表 1 に各品詞における出現数上位の語をまとめる。名詞やサ変名詞では、問いへの回答に必須のキーワードが多く出現している。フィードバックへの評価を表現するものとしては、形容動詞に「大切」や「新鮮」、形容詞に「良い」、「悪い」、「多い」などが得られた。なお、このうち「悪い」の使われ方に注目すると、「良い意見と悪い意見を見ることができて良かった」などの記述がほとんどであり、Web 上の集計画面をそのまま表示するというポジティブ・ネガティブに偏らない授業評価情報の公開が、好意的に受け止められたことを意味していた。これらのことから、フィードバックは全体としては肯定的に受け止められていたと解釈できる。

語の関連 出現数 15 以上の 36 語を対象として、クラスター分析(Ward 法)を行った結果、6 つのクラスターに分類さ

れた(図 1)。以後、図 1 で上から示される順に第 1 から第 6 クラスターの名前で表記する。

第 1 クラスターに出現語が用いられる文例では、「他の受講者の考えていることが分かった」などがみられた。また、第 2 クラスターについても、「先生がコメントをどのように感じて生かしていくか知ることができる良い機会」や、「自他の感じ方の違いを知れる良い機会」などがあり、これらは、自分以外の受講者の評価を知ることができることのメリットに関連すると解釈された。

第 3 クラスターでは「これからの授業をどのように改善していくか知ることができた」などの記述が見られた。第 4 クラスターでは「先生が考えていることをよく知ることのできるいい機会」、「自分とは違った感想を知る機会」などの記述が見られた。これらは授業評価アンケートや授業改善という活動に対する理解を示す物と考えられる。

第 5 クラスターでは「グループ全員の活動や貢献してきたことを振り返ることができて良かった」など、教員からのフィードバックに対して、グループ活動という視点から半期の活動を捉え直す記述がみられた。

第 6 クラスターは、「今後の授業の進展につながるため、メリットがある」、「今後成長していくために必要」など、将来の取り組みと関連する記述が見られた。

否定的記述 最後に、フィードバックに対する否定的記述をいくつか取り上げる。これらは、回答数が少なく、また同一個人が否定と肯定の意見を書いている場合もあるが、可能な範囲で対応することも必要であろう。ここでは、ネガティブに解釈可能と推測された名詞を選び文章を検索した結果を 2 点報告する。

まずは、フィードバックの否定である。文例としては「他の授業では授業アンケートの内容を公表することはないのだからやめたほうがいいと思いました。」の記述がみられた。他の授業で取り扱わないことがフィードバックの否定の根拠となっているが、得られた記述のみでは、「なぜ他の授業と統一すべきであるか」といった根本的理由までは推測ができなかった。

次に、やり方への批判である。例えば「評価コメントの一部がピックアップされて、なにか見せ物にされているような感覚も受けた。匿名だということは分かりますが、そんなにいいなら全てのコメントを出したほうが良いと思った。」

などの記述が見られた。

しかし、上述のように、フィードバックにおいては全データが学生に示されていたため、教員からの説明の仕方等の問題で学生にネガティブな印象を与えかねないという危険性が示唆されたとも解釈できる。

表 1 回答に含まれた主な品詞と出現数^{a)}

名詞		サ変名詞		形容動詞		副詞可能		形容詞	
自分	(203)	コメント	(141)	大切	(8)	今後	(17)	良い	(70)
先生	(83)	評価	(137)	非常	(8)	全体	(10)	悪い	(12)
グループ	(45)	意見	(82)	必要	(8)	ほか	(9)	多い	(12)
生徒	(25)	授業	(81)	貴重	(4)	一番	(8)	嬉しい	(10)
機会	(20)	共有	(39)	新鮮	(4)	それぞれ	(7)	厳しい	(6)

a) ()内は出現数

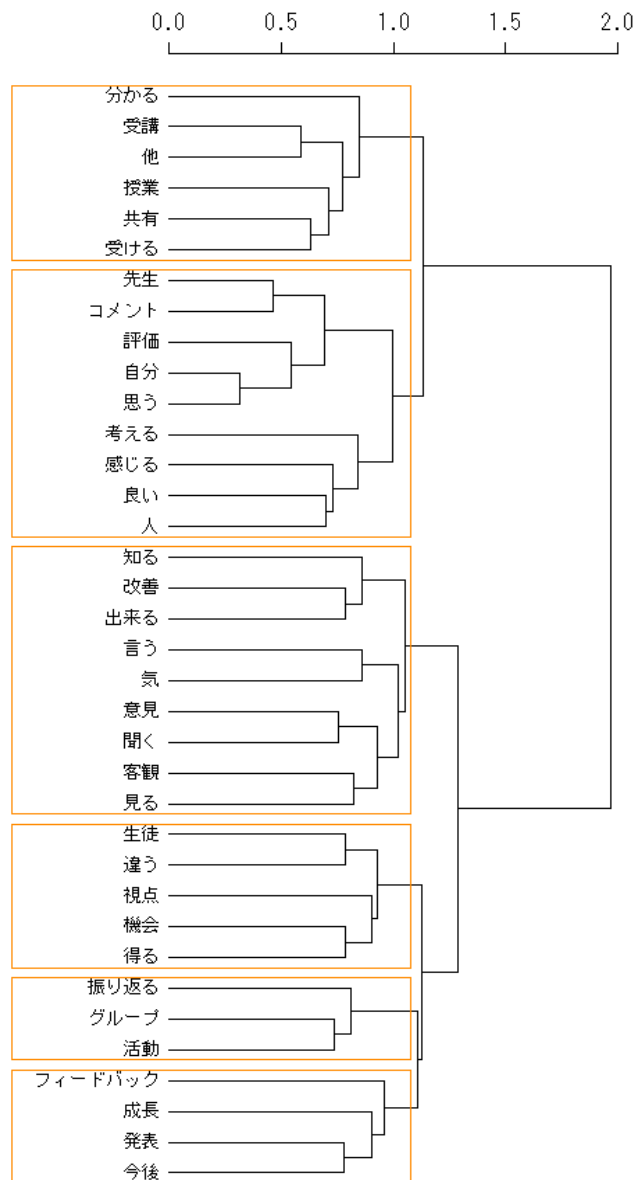


図1 頻出語のクラスター分析

考察

「語の出現頻度を見たところ、評価を表す形容詞などで特に、フィードバックに対する好意的記述が多く見られ、こうした活動が好意的に受け止められたことが明らかになった。

コメントの内容を把握するためにクラスター分析を行ったところ、6つのクラスターが得られた。それぞれ、「他人の評価や考えを知る」、「授業改善への肯定的反応」、「学習内容、グループ活動の振り返り」、「今後の成長」などが表現されており、これらはフィードバックへの好意的評価の理由を示す諸側面と解釈できた。

「他人の評価や考えを知る」、「授業改善への肯定的反応」

と言った回答は、坂本(2005)で指摘された授業評価アンケートの問題点が4SUS内部で同様に再現されたものと理解できる。しかしそれと同時に、フィードバック活動によって学生が授業評価という大学とのコミュニケーションをより肯定的に捉えるきっかけになったと解釈することも可能である。これらは言うまでもなく、授業評価のフィードバックが大学にとって、学習環境を整備するための有効な方法の一つである事を示唆している。また、「学習内容、グループ活動の振り返り」、「今後の成長」と言った回答は、フィードバックが学生の成長の手がかりとして受け止められた事を示していると言えるだろう。

他方、フィードバックに否定的な意見を踏まえれば、教

員は、授業評価のフィードバックが単に情報をまとめて返すだけでは意味を成さないことにも留意すべきである。本研究から得られた結果からは、少なくとも「授業評価や情報共有の意義を説明する」、「多様な意見を取り上げる」、「今後の改善を踏まえた返答を行う」といった、複数の要素を踏まえないければ、逆に不信感を生んでしまう結果になりかねないことが推測された。基本は学生とのコミュニケーションである事を意識し、教員からのコメントを添えて、公正さに配慮したフィードバックを行うことが求められる。カウンセリングマインドや、組織における対人的公正(Bies, & Moag, 1986)⁷⁾等が、これら課題の解決には有用だと考えられる。

最後に、調査とフィードバックに関する学生のコメントから、数点フィードバックにおける留意事項を述べる。これらは決して記述数が多いわけではなかったが、上述の公正さとも関係して配慮が必要と考えられるものである。

まずは、回答の匿名性への配慮である。匿名性には学生からも賛否の声があるが、匿名性への配慮を欠くと、一部学生が自らの修学上の不利益を考慮して素直に授業の振り返りを行わない可能性がある。授業評価のフィードバックがいくら有益であっても、当たり障りのない情報ばかりを共有しては意味が薄れてしまうだろう。特に初年次という導入段階にあつては個人情報の守秘を徹底することが、今後大学で実施される多くのアンケートデータの信頼性と妥当性を保証する事に繋がると考えられる。

次に否定的コメントや意味の不明確なコメントに対するフィードバックについてである。学生へのフィードバックに、教員が自らに都合の良いコメントを選択的に紹介すれば、学生は教育改善への期待を低下させることは容易に想像ができる。できれば最終的な授業評価に先立ち、事前に論理的かつ具体的なコメントの書き方を指導したり、アサーティブにコメントを送る訓練を行う事が望ましいだろう。学生の授業に対する反応が理解できないことには、教員はコメントを用意する事ができず、有意義なフィードバックを行う事は難しい。

以上の留意点は意思疎通成立の必要条件である。本研究の結果からは、それらを踏まえた、学生と教員のメタ的な学びの振り返りが、より良い学習環境整備に繋がる事が示唆されたといつて良いだろう。

近年では ICT を用いた学習成果の可視化に取り組む大学も多い(齋藤他, 2009)⁸⁾。ただし、不適切に数値だけを学生にフィードバックすることは、評価活動の形骸化につ

ながりかねない。特に、初年次学生に、授業評価の意義を伝達し、情報を共有することは、授業の振り返りだけでなく、大学教育全体の評価活動への構えを作るという意味でも、さらなる検討が必要である。

引用文献

- 1) 文部科学省高等教育局大学振興課 大学における教育内容等の改革状況について 文部科学省 閲覧日 2013年3月20日 http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/_icsFiles/afieldfile/2011/08/25/1310269_1.pdf 2011.
- 2) 田口真奈 授業評価の諸機能 山地弘起(編) 授業評価活用ハンドブック 玉川大学出版, pp.31-51. 2007
- 3) 松下佳代 学生による授業評価-現状と課題- 京都大学高等教育叢書, 21, 203-208. 2004
- 4) 坂本 健成 ファカルティ・ディベロップメントとして効果的に授業改善を行うためのリアルタイム授業評価実施の提案 流通科学研究 4, 71-82. 2005
- 5) John Hattie and Helen Timperley "The Power of Feedback" Review of Educational Research Vol. 77, No. 1, pp. 81-112. 2007
- 6) Price, M., Handley, K., Millar, J. and O'Donovan, B. Feedback all that effort but what is the effect? Assessment & Evaluation in Higher Education, vol. 35, No. 3, pp. 277-289. 2010
- 7) Bies, R. J., & Moag, J. F. Interactional justice: Communication criteria of fairness. In R. J. Lewicki, B. H. Sheppard, & M. H. Bazerman (Eds.), Research on negotiations in organizations (Vol. 1, pp. 43-55). Greenwich, CT: JAI Press. 1986
- 8) 齋藤聖子 研究プロジェクト中間報告書 大学の「学習成果」を軸とした教育・評価・エビデンスの発信を可能とする体制についての研究 大学評価・学位授与機構 2009

付録 学生の回答例

・そもそも先生陣はあれを読んでいないと思っていた。学校が一括管理で、評価によって先生の給与を上下しているのだと考えていた。先生に直接届くのならば真面目にやった甲斐があった。私は、匿名制度は要らないと思う。せっかく半年講義を受けたのだから、ああいう機会に先生と直接対話出来れば良い。わざわざ名前を伏せずとも、自分の

考えていることが直接伝わるのが一番だと思う。いくらなんでもそこで評価が低かったからと言っても生徒に対してどうこうするようなセコい先生はいないはずである。むしろ真摯に対応するならばそれの方が良いのではないだろうか。

・「授業評価のフィードバック」をやる事は、とても良い事だと思った。他の受講生のコメントを知ることができて、楽しかった。自分や他の受講生のコメント・評価が共有される、というのも必要だと思う。自分以外の受講生がどうという評価をしたのか気になるし、自分とは全然違った評価もあって、改めて授業についてもう一度考える機会になると思う。先生からコメントを受けることも、また必要だと思う。自分達生徒が評価したままで終わるのではなくて、それに対しての先生の意見を聞いて、自分の中でもう一度考えてみる、というのが大切だと思う。

・自分が成長したということは、「他の人たちの良いところを自分が吸収した」ということだと思うので、発表することで他の人たちに「その人たちの良いところ」を再発見してもらいたい機会になるのではないのでしょうか。また、自分が成長しきれなかったところでも、みんなに発表することで成長できそうなアドバイスをもらったり、成長目標として共有することで、さらに仲が良くなったり、成長することが可能になると思います。

[註]

- (1) 「4つの力」スタートアップセミナーの計画、実施、評価においては、高等教育創造開発センター所属教員の多大な御支援をいただきました。記して感謝いたします。
- (2) 本論文の内容の一部は、2011年度初年次教育学会において発表された。